賀会は原田康夫学長の清興により開始され、関野憲三実行委員長の開会の辞、杉中秀壽実行副委員長の挨拶に続いて、来賓の中原爽日本歯科医師会会長、調枝寛治医学部長、津留宏道広島大学名誉教授よりそれぞれお祝いの言葉を頂戴した。辻本明広島大学名誉教授の乾杯により宴が始まった。

司会者キャロル・ソートンと当ホテルのソムリエとのトークでは、当日の料理ならびにワインは、佐々木元実行小委員長とソムリエとが選別・吟味したもので、他では決して味わえないものである、という説明があった。

余興としては、広島交響楽団による弦楽四重奏があり、会場の雰囲気をやわらげてくれた。あっという間に二時間半が経過し、本田正実行副委員長による閉会の辞により閉会となった。

今回、歯学部創立三十周年を迎えるにあたり、創立より三十年間の足跡を振り返り、また、今後いかにして社会に貢献するかを考えるいい機会となった。本事業を遂行するにあたってご協力いただいた皆様方に、この場を借りてお礼申し上げます。

（たけなか・としひこ）

歯学部と華西医科大学口腔医学院、学術交流協定を締結

歯学部口腔病理学講座 ❖ 二階宏昌

交流の経緯

周知のごとく、広島と四川省とは姉妹県の関係にある。そこで一九八五年に本学と四川省との歯学学術交流が県と県歯科医師会の支援のもとに始まり、毎年一名の前途有望な歯科医師が派遣され、わが国の歯科医療や研究技術を学んできた。

受け入れは既に十名に及ぶが、大多数が省都「成都」にある華西医科大学口腔医学院の教員か省内他機関所属の同校卒業生で占められている。この間、本学からも歴代学部長や教授、学生がしばしば同校を訪ね、教室間で共同研究を進めるなど、交流を深めてきた。

歯学部にとって同校と協定を結ぶことは、各専門分野で中国に存するさまざまな共同研究課題を遂行し、将来を見据えた国際交流の新展開を図るうえで重要との教授会の合意に基づき、一九九三年十月には、当時学部長だった私が揚光華校長（学長）および王大章口腔医学院長と面談し、協定計画についての具体的な打ち合わせを行った。

成都は中国における近代歯学発祥の地

華西医科大学の前身はミッション系の華西連合大学に遡るが、一九五三年人民政府による全国的な大学再配置にあたり四川医科大学に改組、一九八五年に華西医科大学と改称され、近代化と国際化を目標に、中国南西部における医学の拠点として現在に至っている。

五つのカレッジ（基礎医科学、医学、口腔医学、公衆衛生学、薬学）、四つの病院、八つの研究所などを擁する、数少ない政府（厚生省）直轄の医系総合大学である。

さて、その口腔医学院であるが、一九〇八年に発足した中国最古の歯学教育機関であり、現在では、九講座、十九診療科、百の病床を有し、七十八名の教授・助教授、二百名を超える看護婦・技工士など、職員の総勢六百名に近い中国屈指の歯学部である。

特筆すべきは、五年制学部学生とは別に、指導者育成を目的として修士を一貫教育に含めた七年制課程（定員二十）の学生を全国各地から選抜していることで、同課程の設置は、ここ以外では北京と上海の二校にしか認められていない。

授業はすべて英語で行われ、これを実施できる若手の助教授や講師に、講座主任の職務を旧来の教授から一挙に移行させた昨年来の機構改組は、同校でのいわば実験的試みであると聞く。

学部間協定第二号 ―協定書の調印

本協定は、歯学部にとって連合王国ニュー・カッスル・アポン・タイン大学に次ぐ二番目の学部間協定ということになる。協定締結に向けて中国側の推進者であった前院長の王教授とともに、周学東院長、章錦才副院長が来広した。改組に伴い現職に就いた二人は、どちらも三十代の若さである。

協定は本年一月から有効と事前に決めていたが、歯学部創立三十周年記念行事への三人の招待が実現したため歯学部で調印式を行う運びとなり、四月二十八日、周院長と杉中歯学部長の双方が協定書に調印、若い女性院長の祝辞が翌日の三十周年記念式典に花を添えた。

（にかい・ひろまさ）